

書の光

書道研究誌

9
2024



Vol.673
宮城野書道会

秋思 許渾

琪樹西風枕簟秋

琪樹の西風枕簟の秋

楚雲湘水憶同遊

楚雲湘水同遊を憶う

高歌一曲掩明鏡

高歌一曲明鏡掩う

昨日少年今白頭

昨日の少年今は白頭

美しい庭の樹木に秋風が立ち、枕や竹の筵も秋の気配が冷ややかに感じられ、昔、楚山の雲の下や、湘江のほとりで遊んだ友人らを思い出す。

声高らかに一曲歌つてみたが、自らの姿が嫌になり鏡を覆い隠す、見れば、昨日の少年が白髪になつてゐるから。

《琪樹》美しい樹木。琪は美玉をいう。

《西風》秋風。

《枕簟》枕と竹で編んだ敷物。

《楚雲》楚国の空の雲。

《湘水》湘江。湘は湖南省の別名で洞庭湖に注ぐ湖南省最大の川。

《同遊》ともに遊んだ友人。

《明鏡》曇りのない鏡。

清秋や錦秋そして秋麗などと形容される豊穣の秋。その一方で、冬へ向かう衰退の象徴とも取れる秋は詩の素材として好まれ、「悲秋文学」として中国文学の大きな主題の一つです。この詩は、許渾が秋を迎えて自分の老いを嘆じた詩です。

作者の許渾（七九一～八五四）は晚唐の詩人です。若い頃から病弱で苦学の末、四十一歳で進士となりました。左遷や免職も経験しましたが、自然を愛好し晩年は潤州（現在の江蘇省鎮江市）の川のほとりに隠棲しました。

「西風」は春の風を指す東風とは対照的に秋風を言います。美しい庭の樹木に秋風が立ち、夏物の枕と敷物などの寝具も肌寒くなつて、秋の訪れを感じます。

「楚雲」楚は湖北省・湖南省一帯を指します。また楚の襄王が巫山の神女と遊んだ「巫山雲雨」の故事を念頭に読み込んでいます。また「湘水」は湘江のことと、洞庭湖に注ぐ湖南省最大の川です。春秋時代の聖天子舜王が病没し、これを悲しんだ二人の妃が身投げして水神となつた伝説があります。許渾はロマンチックな神仙思想に耽つた青年時代を「楚雲湘水」と表現して共に遊んだ友人を懐かします。そして声高らかに歌おうとしましたが、鏡に映つた年老いた自分の姿を見て、鏡に蓋をしてしまいます。終句の「昨日の少年今は白頭」解説の要らない明解な一句です。

秋を迎えて自分の老いと重ね合わす手法は、「白髮三千丈……」で有名な李白の「秋浦の歌」も同様です。また魏の詩人阮籍（二二〇～二六三）の「詠懷詩十七首其五」に「朝爲媚少年、夕暮成醜老（朝には媚少年たるも、夕暮には醜老と成なる）」とあります。

今夏のような猛暑はもう懲り懲りですが、我々も秋風が吹き肌寒くなると何となく寂しさを感じ感傷的になります。

第51回

宮城野書道展

■会期／令和六年八月二日(金)～六日(火)

■会場／せんだいメディアテーク 5Fギャラリー

特別出陳 大島 崇山 先生

葉落風流 積葉滿村後堂月影
憶了此身如水 淘沙易復還南江之

北江

大島謙介

特別出陳 大島謙介 先生

書道仲卿早苦因禪有致自相競紫府燒

太白以雪若漫川派私拾薪一

東漢建安植林正雅叔正諸生代賓酒於室之題山石

贊助出品 井上 泰三 先生

大島謙介全無變色

吉三先生書



贊助出品 工藤聖泉 先生

一應事務盡虛無般般漫卷在簾前落葉聲
應聲玉枕長吟此聲多少是些微聲響
此聲輕柔難奈何玉枕未可如意草草頓作

会長 佐藤 象雲



会長 佐藤 象雲

誰向東流急澗去空谷裏鳴鶯也向東
稀疏繁重雲霞裏火葦日日照中華
獨立原野競自由衆綠意高士詩心去

前会長 佐藤 悅石

宿昔青雲走蹉跎白髮年誰
知明鏡裏形影自相憐

同人
佐藤
朴峯

同人
菅原
紫雲

A traditional Chinese ink painting, likely a dragon or a stylized cloud formation, depicted through expressive, swirling brushstrokes. The artwork uses varying ink tones from light grey to dark charcoal. A small red square seal is visible in the lower-left corner.

同人
和泉
溪石

海舶橐橐
曲屏深慢
閑幽香漫
軍引身
夢燈暗
人故鄉
腸少日曾題
萬枕橫森
編殘稿鎮
君占晴
人向
萬角清
君占晴
輕絕羣
利多
君占晴
誰忘錦書
銷遙桃花
為重地
君占晴

同人
熊谷
彩雲

閑眠白晝三杯醉
酌青衫一曲琴

同人 佐々木 迫水

今に非ずの福故無き難は造物の釣餌に
非すは即ち人せの機阱なり此の處に眼を着くこと
高からざれば彼の術中に墮つこと鮮し

准同人 千葉 華泉

卷之三

同人 渡辺 無象

鶴向東游史向西數聲鶯飛入夏風中
紅柳葉門處似楊生苔上路通樵宮客來山第
多風物傳多興亡和猶所恨求安計之圖集卷一
准同人 加藤 紫水

准同人 菅原 聖雪

是明伦之漢時為武帝
橫臥重眼爭強力
擣筆驚月石鱗鱗
甲兵轔然波濤怒
飛雲裏森冷逼
房壁半開寒氣極
王唯鳥道深滿地
一邊吟詩一邊書

准同人 日野 象圃

風勁角弓鳴，將軍獵渭城。
枯鷹眼疾，
一箭
盡馬蹄。輕忽過新豐市，還歸細柳。

准同人 和泉秀華

家父督年曾深年華中亦自名高士牛生煙火氣
不需作伴身山谿水湘把流神堪比肩贊然不澤
清淨禪音遠益清說意蓮香於携移之贊水仙
李東陽

種之
水仙
夏威

准同人 大原 積雪

第51回 宮城野書道展

無監查
石田
蒼龍

無監查 菅野 溪香

無監查 片桐暢象

陶令辭折腰畫竹使君漫畫龍何事忘憂如此詩正續修編
訪古人黑雲深處隱翁石顏坐蒼烟中疏雨橫誠苦底隱古題玉
姍一簷雲外渺中華日清了萬葉疊層堆雜名流門陳夙紳

無監查
齋
有韻

野外空一束窮愁寥落無聊賴自掩前扉空念蹉跎想
因復墟生牛披羊羣青竹石一簾忘世事方知長
矣林泉長教自己處方心在於家教玉雪流風暖葉
清集

無監查 佐々木 滴翠

日高睡足猶慵起小園東望不相寒。遠望高鐘秋枕聽。
重疊峰巒攢簇處。是些名地。可鳥何為。
老來心泰身寧。古歸事如鄉。何惜至長安。

無監查 志子田 紫苑

江煙岸曉日沉暉千重暮雨橫
萬葉秋聲冷畫角東方朔畫屏
蓮葉荷花未盡時綠意風搖
萬葉秋聲冷畫角東方朔畫屏

無監查 高橋 如雲

新編詩集卷之三
庚辰歲次己未夏月
王國維著
丁巳秋月
王國維著

陳氏山房
清陰堂

【第一部】

この度は第五十一回宮城野書道展におきまして、大変名誉ある
賞をいただきありがとうございます。
ご指導くださいました会長の佐藤象雲先生に心から感謝申し
上げます。そして諸先生はじめ、いつも温かい言葉をかけて下
さった教室の方々に御礼申し上げます。これからも書くことを
楽しみながら精進して参りたいと思います。今後ともどうぞ宜
しくお願ひ致します。

土筆支部 庄子 光峰



第五十一回宮城野書道展

部 分

少室山月日暮此景別時生愁悵望歸心急
難擋。銀燈照牀方纔入夢，驚人鶯鶯嬌聲
大驚。曉天雲霧迷離，但見後簷垂柳而後知
是春來。未綰帶乍起，年少傷感心猶急。始
知草葉未盡，未解帶乍起。

宮城野書道展大賞 庄子 光峰

涼風蕭蕭聲蟬
傷懷誰知人
悲歌
天地萬物
盡有才
可憐
黃菊
青綠生眼
李清

宮城県知事賞 菊田 昌園

宮城県芸術協会賞 高木操子

東山春曉
寒林渡泊
夜歸人
丁巳仲夏
吳昌碩書

卷之二

師範会長賞 千葉 東雲

重闕遠見清揚拂拂是而心口徑傳身畫眼立浪靜
舟人在詰與見渺空相無聲黃色萬里歸心
弱月以舊景已隨紅葉共更墮江上鼓鼙聲

河北新報社賞 高橋 華雲

曾與君家涉我所燃青蘋火生年我莫窮愁江不流
舞者誰歎美傷人多嘆聲未盡多難知更宿
多病頭有海嘯苦露寒如醉遺體未盡清漫仍嘯歌
把琴月不彈力弱東一葉吹去空無絕音

準特選 荒井 紅彩

越子

神惠浦望草中全謂高令

詩集正序詩卷之二
三月六日 審定詩石翁書

準特選 白井 久理

義念智禪 痘經半的空身五外著方
階前泉聲空夕陽是雨之多雨多
庭除夜深花淨 不知人意心 久理

準特選 久保田彩華

松柏本孤直難為桃李顏時嚴子陵垂釣滄浪湖身
將寄隱心與浮雲閒長揖若乘石還歸富春山
清風灑六合雖然不可舉使我長歌息黑樓巖石間

準特選 佐藤 友美

準特選 鈴木 逢心

別館共異聞一葉僅多移轉風雲葉重猶北影輕
陰散雨歇南山綠到來柳葉隨天仗蓮舟也
佳時風雨如煙澤漫復重晴天著人醉矣

【第二部】

仙台市長賞 林 藤華

重歸赤道未竟因之歸船是那未嘗不思理家事
功那了無是歸船是那未嘗還家懷有故鄉風情了先念自家
生老是後辭是那一轉眼方始登舟去其半艤載多難斗酒
愁愁顏多酒局心多難多愁多難多愁多

讀壳新聞社賞 叶 大

墨妙樓此歌聲應鐘之聲持掌松樹之抱
靜心極歸曉窗畫幅何堪此落日之餘
作風爐烟薰氣動乳堂紙香落大聲

書の光賞 石森 房恵

房恵

傳寄集遊雲外蘋神龍棲岩洞
中淵雪如孤東煙如炳白麻舡
懸東海天 石川丈少詩富士山美書

準特選 藤田 桃泉

春深牧宿懷里晨星隱洞常苦寒夜雲消
移多冰沙苦移老風寒仰晴不休唐公望懶
撫琴於坦園博雅館藏孤獨空無文名此萬邦賓

書の光賞 相田 早智

柏下問童子言師採藥太
只在此山中雲深不知處

準特選 稲葉 福音

清風入喜初照多林中道幽處深
房花未深才半覺香任浮雲久人已
萬籟此俱寂惟聞鐘磬音 稲葉書

準特選 須藤 七実

寒陽引樂蕭瑟舞白羽龍
江城四月落花月使入迷

準特選 邊見 芳象
新人賞 斎藤 俊哉

漢國山河在秦陵草樹深
暮雲千里色無處不傷心

底裁書山

新人賞 鈴木 哲夫

得時無忘

哲夫書

新人賞 真壁 宏

山居西來客江波苦逐萬家
滌枯裡修篁古滿城

この度は、宮城野書道展大賞という大変素晴らしい賞を頂き本当にありがとうございました。ありがとうございました。「大賞」を受賞できる実力があると自分自身思つていなかつたので驚きとともに嬉しさが込み上げてきました。また、大賞に選んでいただけのこと、とても喜ばしい限りです。

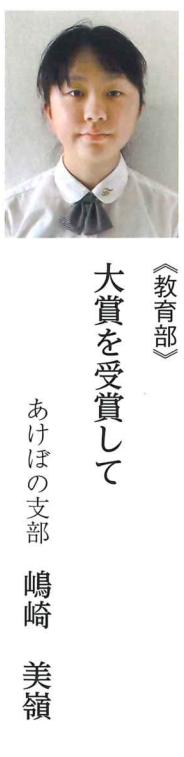
今までご指導くださった渡辺無象先生に深く感謝申し上げます。これからも賞を励みに精進してまいります。今後ともご指導のほどよろしくお願ひいたします。

《教育部》

大賞を受賞して



あけぼの支部 嶋崎 美嶺



【学生部】

何れの処よりか秋風至り 蕭蕭として雁群を送る 朝来 庭樹に入り 孤客 最も先に聞く

け
喜
び
秋
風
が
蕭
蕭
と
し
て
雁
群
を
送
る
朝
來

東
方
庭
樹
獨
處
の
家
先
聞
き

《大意》秋風は、どこから來るのであろうか。さびしい音をたてながら、雁の群を送つて來る。今朝がた、その秋風が庭の木に吹きいつたのを、

ただでさえ心をいたませている孤独な旅人、この私は、誰よりもさきに聞きつけた。（劉禹錫詩・秋風引）

清夜群動息み
高居俗氣無し

清
夜
群
動
清
夜
空
羣
動
高
居
無
俗
氣
高
居
無
俗
氣

《大意》清く澄みわたる夜にはあらゆる活動するものが終息するが、超然たる塵外の居には少しの俗氣もない。

読み 笑って謝る桃源の人（にこやかに、この桃源郷の人に別れを告げて言う）

桃 謝 入 源 笑

佐藤象雲書

一般部規定課題(解説)

一般部規定課題出品について

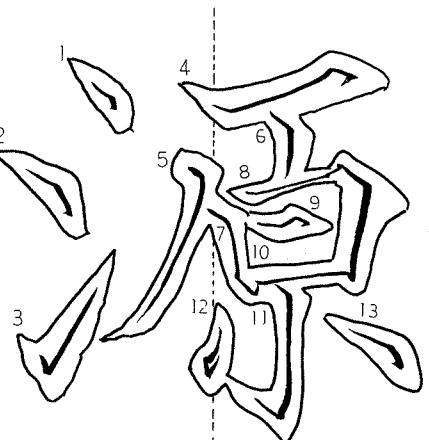
- 規定課題は段級の区別なく、前頁掲載の五言句となります。
- 初段以下の方に限り、前半二文字または後半三文字でも構いません。
- 規定課題（楷書）の出品はひとり一点に限ります。

横括がりになり易い字。中央の「身」を引き締める。

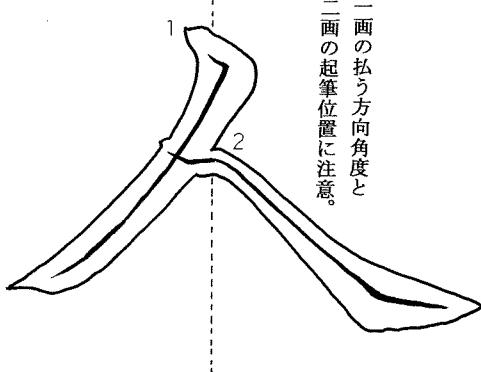
第八画横画はやや右上がりで短めにす
ることによって右払いを引き立てる



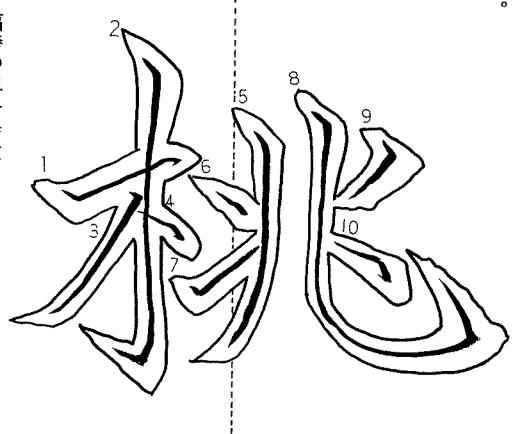
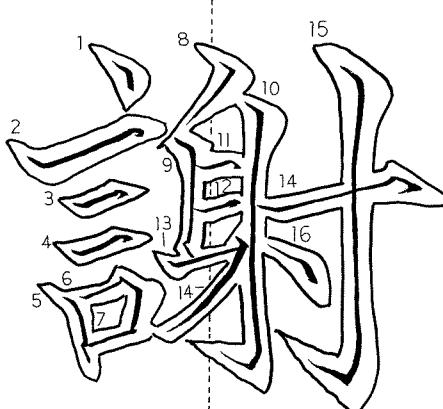
サンズイ各点の位置取りに留意。
旁は中心を整えて整正に。



第一画の払う方向角度と
第二画の起筆位置に注意。



偏旁の組み込み方を工夫する。
旁は筆順に気を付けて左右照應させる。



連月課題
王維詩

「藍田山の石門精舍」
(後半)

朝梵林未曙

朝梵

林

未だ曙けず

夜禪山更寂

夜禪

山

更に寂たり

道心及牧童

道心

牧童に及び

世事問樵客

世事

樵客に問ふ

暝宿長林下

暝に宿る

長林の下

焚香臥瑤席

香を焚きて

瑤席に臥す

潤芳襲人衣

潤芳

人衣を

襲ひ

山月映石壁

山月

石壁に

映す

再尋畏迷誤

再び尋ねるに

迷誤を

畏れたれば

明發更登歷

明發

更に登歷せん

笑謝桃源人

笑ひて謝す

桃源の人

花紅復來覲

花の紅なるとき

復た來りて観はん

草書

行書

This image shows a piece of Chinese calligraphy in cursive script. The characters are written in black ink on a white background. The text reads from top right to bottom left: 源笑人謝柳 (Yuan Xiao Ren Xie Liu). The characters are fluid and expressive, with varying line thicknesses and ink saturation.

次号課題

隸書

來花源笑
賣紅人謝
復桃

花の紅なるとき復た來たりて覗わん

◇各体とも書風は自由です。特に上位者は古典などを参考に創意溢れる作品を出品ください。

※成家・師範の随意作品出品は一点までです。

(両部とも本会所定の指定用紙を使用のこと)

		支 部	
		順 位	
		氏 名	

空き抜けて天上の紺

曼珠沙華

束 帯 紳 莊 徒 緋 眇 瞠

東 香 乾 庄 仙 囂 暈 瞪

東 帶 紳 莊 徒 緋 眇 瞠

佐藤象雲書

音
ソクタイキンソウ
ハイカイセンチヨウ

略解
衣冠束帶した人は容儀を整え威厳を保ち
行きつ戻りつ前後をながめ顧みるよう